

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

2017年(平成29年)10月16日 月曜日

無料

第65号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)10月16日 月曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、64歳、経営
コンサルタント、趣味は、縄
文文化研究、この2月に株
式上場プロフェッショナルを
養成し、IPOの経営者教育
も行うスクール『IPOマス
タースクール』を開校、校長
就任



東北大学は東北の一大起業拠点になりうるか？ そして上場企業産出拠点になりうるか？ ーインデペンデンツクラブ東北(10/6)に参加してー

インデペンデンツ クラブ東北参加

十月六日午後、会場は東
北大学理学部青葉サイエ
スホールで、国立大学法人
東北大学、特定非営利活動
法人インデペンデンツクラ
ブの共同主催により、「イ
ンデペンデンツクラブ東
北」が開催された。
インデペンデンツクラブ
という組織は、有望なベン
チャービジネスを発掘し、
上場企業にまで育成してい



満席の会場

こうという特定非営利活動
法人である。
大学教授や弁護士、特許
関係者、ベンチャーキャピ
タル、種々のコンサルタント
トなどが、そうした任務を
担おうと、全国でベンチャ
ービジネスと交流し、時に
は厳しいアドバイスも行う
組織である。
筆者はインデペンデンツ
クラブの会員であり、普段
は東京丸の内での定例会に参
加しているが、どうしても
この東北開催に参加したく

インデペンデンツ クラブ東北の印象

てずっと機会をうかがって
いて、ようやく実現した。
目的は、口開けのパネルデ
イスカッションテーマにも
あるように「大学発ベンチ
ャーと地域創生」の現況確
認であり、東北復興のため
に東北大学がどういう役割
を担うのか、あるいは今後
担えるのかを確認するため
だった。
会場探しの際、まずは東



有望VBのプレゼン

北大学の青葉キャンパスの
広さに度肝を抜かれた。
あまりにも広すぎて、案
内看板を見ながら会場を探
したが迷い、再度場所を確
認しに戻ったほどだった。
しかもまだキャンパスの増
築中で、東北最大の研究拠
点であると納得した。
それとともに、どんなベ
ンチャービジネスが存在し
て、当日はどんなプレゼン
があるのかワクワクした。
また、参加者の多くが東北
大学の関係者と聞いており、
第一印象でそうした雰囲気
を感じた。

でも、なぜ東北には上 場企業が少ないのか？

当新聞第五十七号の一面
でも取り上げたが、東北に
は上場企業が非常に少ない
人口十万人あたりの上場
企業の都道府県ランキング
をみると、四十位台が三
県、三十位台が二県、宮城
県は東北六県中最も上位で
はあるが、それでもやっつと
二十六位という状況である。
地方だから低いというわ
けでもなく、北陸三県はト
ップ10入りしている。

IPOプロフェッ ショナル育成を訴える

交流会に移り、そうした
筆者の考え方を何人かに訴
えた。
研究者以外の経済人には
理解してもらえなかったが、研究
者には理解してもらえな
かったようだ。
交流会も終わりに近づい
たとき、ある団体理事と話
す機会があって、経営プロ
を育成すべしとの筆者の話
に興味を持ったようだが、
いまだに接触がないのが残
念である。

古い知人にも会えた

昔、筆者が新規上場遂行
で悩んでいたときにアドバ
イスもらったベンチャーキ
ャピタリストに会えるかも
しれないということだった。
案の定、会場に来ていた。
すぐさま会いに行き、近況
を話した。
そうすると意外な話があ
った。ライフワークとした
東北大学発ベンチャー育成
はうまくいかなかったとい
うのである。
やはり、前記の「課題」
が主要な原因を形成してい
るようだ。
東北大学に限らず、東北
に、プロ経営者育成機関連
置が急務であると感じた。

研究か？経営か？

三人のベンチャー企業経
営者のプレゼンを聞き、コ
メンテーターの評価も聞い
て、妙に納得した点がある。
それは、やはりバリバリの
研究者は経営者にはなれ
ないという点である。
思考、発想、目的などが
百八十度異なるのであり、
両方を満足させるようなス
ーパーマンはいないのだ。
結局のところ、経営者は企
業外から連れて来なければ



交流会



東北地酒ラインアップ

暑さが和らぎはじめた九月十六日、二十九回目の三陸酒海鮮会を開催しました。東北地酒は、人気の写楽や日高見、AKABUに加え、

第29回 三陸酒海鮮会 2017.9.16開催 「バクライ」も登場

なかなか入手できない山和が加わりましたが、またたくまに消費されました。また、サプライズの「バクライ」が出たのにはほんとに驚きました。このところ、料理にホヤ関連のものが頻繁に出ており、ホヤの国内消費拡大とPRに少しは貢献出来ているのではないかと自負しています。いつもながら、税込五千円会費では大出血であろうと思われる豪華地酒ラインアップと海鮮類には、オーナーとお店サイドに感謝いっぱいです。

会の終わり頃には、私の誕生日を祝っていただきましたが、これまたサプライズでした。みなさんありがとうございました。



バクライ (ほや塩辛とこのわた)



豪華海鮮



第38回 水産業再興のための 料理レシピ紹介 《鱈とジャガイモの オーブン焼き》

がぼちゃも少し
入ってますが、
ジャガイモだけ
で充分です。
(松本)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピ

【材料】 生鱈 200g 塩、コショウ、ジャガイモ 2個、ピザ用チーズ 30g、しょうゆ 小1/2、ニンニク、玉ねぎ 1/4、トマトホール缶 1/2、しょうゆ 大1、ピーマン 10g(千切り)

【作り方】 ① トマトソースをつくる。オリーブオイルでニンニクと玉ねぎ(みじん切り)を炒め、ホールトマトを加え混ぜながら8~10分程煮て、しょうゆを加えます。

② 鱈は、一口大のそぎ切りにし、塩・コショウをします。(骨はとりのぞく)

③ ジャガイモは、皮をむき、5~6mmの厚さに切って、水にさらす。ラップをして電子レンジに2~3分加熱しておきます。

④ 耐熱皿にバターをぬり、鱈、トマトソース、チーズを交互に重ね、しょうゆをふり180℃のオーブンで約10分焼から15分終わりにピーマンを彩りにのせる。

写真でお伝えする

写真撮影:尾崎匠

東北の風景(紅葉と祭の彩り)



東北・みやぎ復興 マラソンが初開催!

「復興」の名を冠したマラソン

10月1日、「東北・みやぎ復興マラソン」が開催された。東日本大震災の大津波で大きな被害を受けた宮城県沿岸部、名取市・岩沼市・亶理町にまたがるエリアを走る、震災後の宮城県内で初となる公認フルマラソン大会である。津波対策としてかさ上げされた県道塩釜亶理線を走り、岩沼の震災復興のシンボルであった災害時の避難場所でもあった「千年希望の丘公園」や建設中の防潮堤などを望むコースである。

この大会の目的として、「被災地復興の『今』をマラソンというスポーツを通じて、日本や世界に伝えたい」と、「震災を風化させることなく、今なお続く『復興』を走ることによって支援する」ことが挙げられていた。復興への願いを込め、被災地の復興に役立ちたいという思いで「復興マラソン」という名を冠し、その名に恥じない大会にするべく、開催に掛かる多額の費用を、開催場所が被災地である点を考慮して開催自治体には補助金の拠出以外部分での協力を求め、参加ランナーの参加料と開催趣旨に賛同した企業の協賛金のみで賄うことを目指したという。

また、マラソン大会運営そのものだけでなく、集まった資金の中から被災地に役立つ復興支援策を実施するとして、「子どもたちの健全な心身と地域への愛情の育成」、「震災の『風化を防止』し、全国・世界の支援者との強固な絆の構築」、「被災地域のにぎわい創出・交流人口や定住人口の拡大」の3つの支援策を掲げ、継続的な復興支援を行うていくとしている。具体的には今回は、12の被災自治体のスポーツ少年団にスポーツ用品を、1つの被災自治体に「防災・減災広報車」を贈呈し、また大会を

一過性のものにするのではなく、ランニング文化を育むことを目指すとして今回のマラソンコースに距離表示看板を設置した。

ぜひ、参加!

そのような趣旨のマラソンであるこの「東北・みやぎ復興マラソン」、「東北」と「復興」という、私にとって重要なキーワードが2つも含まれている。関心は大いにあったのだが、当初参加に関しては迷っていた。理由は何かとない、私自身がフルマラソンを走ったことがないからである。毎年5月に開催される「仙台国際ハーフマラソン」には、一般参加ができるようになった2012年から毎年参加しているが、ハーフマラソンですら毎回ヨロヨロになりながらゴールする有様であるので、その倍の距離を走り切れるとは到底思えなかったのである。

そんなわけで気が付いたら応募締切日を過ぎてしまっていたのだが、そうしたらなんと、定員に達せず締切を大幅に延長することになったと聞いた。初開催という事で知名度がまだそれほど高くなく、参加料が14,000円と高額(東京マラソンでも10,800円である)だったことなどが影響したようである。それなら完走できるかどうか分からないけれども参加してみようかと思った。

私のような人が他にもたくさんいたのだらうか。ふたを開けてみれば、フルマラソンは結局当初予定の12,000人がエントリーして、問題なく開催となった。12,000人が走るの、スタートはウェーブスタートというそうだが4回に分けて行うことになった。私は第2ウェーブのスタートだったが、10分間隔で3,000人ずつスタートの号砲が鳴った。

案の定、スタートから20kmくらいまでは何とか走れたが、そこから先の未知の世界では本場にゴールが遠かった。普段通勤で乗っている自転車とは違い、速度が遅いために周囲の景色の移り変わりが遅くじれつたくなること、足を止めたらその先一歩も進まないことなどで正直かなりしんどかった。

それでもやはり沿道の声援は本当に力になった。仙台国際ハーフマラソンでも聞く、「頑張つて!」、「フアイト!」という声に混じって、「ありがとう!」という声が多かったのには驚いた。震災後、人の賑わいが遠ざかっていた沿岸の集落の方々からすると、12,000人もランナーが大挙して訪れるということに對しては、まさに「ありがとう!」という気持ちだったのかも知れない。

沿道で声援を送ってくれた方々の中には、大きなざとにたくさんの塩タプレットを入れて、道行くランナーに「どうぞ持つて行ってください」と声を掛けてくれたり、後半になると走る脚のトラブルが生じるランナーが出てくるということを見越して、エアサロンプラスを準備して「エアサロンプラスあります!最後まで頑張つてください」と声を掛けてくれたり、単に声援を送るだけではない人も多数見掛けた。こちらこそ「ありがとう!」である。と同時に、この辺りのことが実に東北らしいとも思った。

「BACK TO THE HOMETOWN」

そう、この復興マラソンの特徴は他にもある。集落の名前を冠したスペシャルエイド「BACK TO THE HOMETOWN」である。今回のコース上には、「閑上」、「小塚原」、「美田園」、「北釜」(以上名取市)、「相野釜」、「藤曾根」、「二野倉」、「長谷釜」、「蒲崎」、「新浜」(以上岩沼市)、「荒浜」(亶理町)の合わせて11の集落があった。しかし、すべての集落が津波によって甚大な被害を受けた。集落に住んでいた方々は長期の避難生活を余儀なくされた。11の集落のうち岩沼市にあった6つの集落は、災害危険区域となった先祖伝来の土地からの集団移転を決定して、海岸から内陸に3キロ入った玉浦地区の西側に新しい街をつくった。現地再建を選んだ残り

の5つの集落でもまだ震災前の状態には戻っていない。これらの集落があった場所に今回、「BACK TO THE HOMETOWN」と名づけられたエイドステーションが設けられた。「BACK TO THE HOMETOWN」には当日、かつての住民が再び集い、ボランティアの人と一緒に水やスポーツドリンクを準備してくれただけでなく、地域に伝わる郷土料理を提供してくれたり、伝統芸能を披露してくれたりもした。

当日は「はらこめし」(醤油などの調味料で煮込んだ鮭を込んだ煮汁で炊き込んだ鮭といくらの「親子丼」)、「せり鍋」(昆布や鰹節の出汁に鶏肉とせりを根っこ部分まで入れて醤油などで味付けして食べるなべ)、「岩沼とんちゃん」(ジンギスカン用の鍋で焼く豚のモツを用いたホルモン焼き)、「浜焼き」(水揚げされた新鮮な海産物を炭火で焼いたもの)などが振る舞われた。

フルマラソン開催日に「当時の集落の賑わいを復活させたい」という実行委員会の思いで実現したまさに特別なエイドステーションである。このマラソンは今後も年に1回開催される予定であり、「年に一度故郷が『BACK TO THE HOMETOWN』として蘇る」という趣旨で今後も設置され、ランナーと地域の人との交流の場となるに違

雄勝石の「Finisher Stone」

さて、結局私の方はとやうと、筋肉痛で痛む脚を鞭打ちつつ、沿道の声援に背中を押していただいて、何とかなんとか3時間41分で完走できた。もう二度とやるものかと思つたが、ゴールして嬉しかったのは完走した人がもらえる「Finisher Stone」である。要は、石で造ったメダルなのだが、この石が何と、石巻市雄勝町特産の「雄勝石(おがついし)」だったのである。

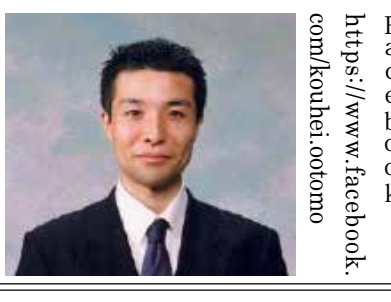
雄勝町は震災前、国内の硯の9割を占める圧倒的なシェアを持っていたが、その理由が町内で産出する「雄勝石」だったのである。硯だけでなく、高級な屋根材や庭石としても珍重されているそうだが、その歴史は古く、室町時代にまで遡るといふ。

今回の「Finisher Stone」は、震災の大津波で流失し、地元の方々やボランティアの方々が回収した雄勝石を使っているとのこと、まさに復興の名を冠するマラソンに相応しい素敵な記念品となった。大会事務局では、「大震災を乗り越えた石!復興の象徴の石」として、「42.195km」という通常では考えられない距離に挑戦し、見事に乗り越えられた『強い固い、意志』を持つランナーの方々に相応しいメダルを贈りたい」との思いを込めたそうである。

被災地のグルメを堪能できる「復興マルシェ」
スタートとゴールの会場である岩沼海浜緑地では、「復興マルシェ」も開催された。各ブースでは、宮城県内の30超の市町村、それに福島県、岩手県、熊本県のグルメが味わえた。本県のグルメが味わえた。ランナーだけでなく、会場を訪れたすべての方が楽しめるという趣旨のイベントで、実際たくさんの方で賑わっていた。

こうして各地域の名物料理が一堂に会する様を見ているとつくづく、東北には豊かな自然の恵みが多くあることを実感する。この時期の亶理町の名物である「はらこめし」など特に人気のある名物料理はあつという間に品切れになっていった。私の好きな宮城県加美町のやくらいビールも、私たちがゴールする頃には全種類品切れとなっていた。マラソンで走らなくても、被災地各地のグルメを横断的に堪能できる場としても、この「東北・みやぎ復興マラソン」は貴重であると思つた。

執筆者紹介
大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

「被災地復興の『今』をマラソンというスポーツを通じて、日本や世界に伝えたい」と、「震災を風化させることなく、今なお続く『復興』を走ることによって支援する」ことが挙げられていた。復興への願いを込め、被災地の復興に役立ちたいという思いで「復興マラソン」という名を冠し、その名に恥じない大会にするべく、開催に掛かる多額の費用を、開催場所が被災地である点を考慮して開催自治体には補助金の拠出以外部分での協力を求め、参加ランナーの参加料と開催趣旨に賛同した企業の協賛金のみで賄うことを目指したという。

また、マラソン大会運営そのものだけでなく、集まった資金の中から被災地に役立つ復興支援策を実施するとして、「子どもたちの健全な心身と地域への愛情の育成」、「震災の『風化を防止』し、全国・世界の支援者との強固な絆の構築」、「被災地域のにぎわい創出・交流人口や定住人口の拡大」の3つの支援策を掲げ、継続的な復興支援を行うていくとしている。具体的には今回は、12の被災自治体のスポーツ少年団にスポーツ用品を、1つの被災自治体に「防災・減災広報車」を贈呈し、また大会を

一過性のものにするのではなく、ランニング文化を育むことを目指すとして今回のマラソンコースに距離表示看板を設置した。

そのような趣旨のマラソンであるこの「東北・みやぎ復興マラソン」、「東北」と「復興」という、私にとって重要なキーワードが2つも含まれている。関心は大いにあったのだが、当初参加に関しては迷っていた。理由は何かとない、私自身がフルマラソンを走ったことがないからである。毎年5月に開催される「仙台国際ハーフマラソン」には、一般参加ができるようになった2012年から毎年参加しているが、ハーフマラソンですら毎回ヨロヨロになりながらゴールする有様であるので、その倍の距離を走り切れるとは到底思えなかったのである。

そんなわけで気が付いたら応募締切日を過ぎてしまっていたのだが、そうしたらなんと、定員に達せず締切を大幅に延長することになったと聞いた。初開催という事で知名度がまだそれほど高くなく、参加料が14,000円と高額(東京マラソンでも10,800円である)だったことなどが影響したようである。それなら完走できるかどうか分からないけれども参加してみようかと思った。

私のような人が他にもたくさんいたのだらうか。ふたを開けてみれば、フルマラソンは結局当初予定の12,000人がエントリーして、問題なく開催となった。12,000人が走るの、スタートはウェーブスタートというそうだが4回に分けて行うことになった。私は第2ウェーブのスタートだったが、10分間隔で3,000人ずつスタートの号砲が鳴った。

案の定、スタートから20kmくらいまでは何とか走れたが、そこから先の未知の世界では本場にゴールが遠かった。普段通勤で乗っている自転車とは違い、速度が遅いために周囲の景色の移り変わりが遅くじれつたくなること、足を止めたらその先一歩も進まないことなどで正直かなりしんどかった。

「人知れず、勝つ」 東北の事

明治元(一八六八)年秋。薩摩軍総差引(司令官)西郷隆盛は総督府下参謀・黒田清隆に対し、奥羽越列藩同盟および会庄同盟に属す東北越後諸藩の中で最後に降伏した庄内藩に対する処遇を指示した。

薩長両藩が「朝敵」と呼んで標的とした、戊辰戦争のまさに発端的存在である会津・庄内二藩の降伏後の処遇の内容は、全く不公平に思えるほどに対照的だった。会津藩領は戦火で荒廃し、多数の死者を出した上、家老は処刑。二十三万石から三万石に大減封、北半



奥羽越列現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

島の苦しい生活を強いられ

たのに対し、庄内藩は領内に敵軍を踏み込ませず、有利な戦いを進めたまま周囲の戦況を考慮して降伏。減封は十七万石から十二万石に留まり、主家は罰されず、武士の帯刀も許された。

庄内へのこの寛大な処置に関わった西郷の、その処遇の理由として、同じ武士としての共感、そして敗者に残酷な長州藩への反感があったと言われ(薩摩が江戸で起こしたテロ的騒乱―取締役の庄内藩が恨みをかう契機となる―に対する贖罪意識もあつたかも知れない)、これを知った庄内の人々が感激したという美談として伝えられている。一方では、庄内藩の軍備に多大な貢献をした日本一の豪商・本間家からの、新政府への莫大な献金があつた事の引き換えだったとも言われるのだが、当時多くの人が認めた西郷という人物の大きさ、そして庄内の決して最新軍備だけではない、藩内に行き渡った高い教育体制に裏打ちされた強さは、創作の余地のない、歴史の真実を示すものである。

が、本稿で紹介したい一冊は、より庄内藩そのものの描き込み、西郷との関係に重点を置き、簡潔な文体で書かれた『庄内藩幕末秘話』(宇田川敬介 著)。

庄内藩主・酒井忠篤が家臣に宣言する場面がある。「江戸の市中に騒乱を起し、汚い手を使い、それで天下を掌握する事など許しては人の道に反する。(中略)我らは幕府のために戦うのではない。人の道の正しさを示すために戦う。」

戦後、黒田が忠篤に語る。「忠孝を中心とした人の道、それがこの庄内にはあるんですな。そのような藩を敵に回した薩摩は、完全に間違えておわした。」

本書は庄内人によって書かれたものではないので、手前味噌なところがない分、美談調を憚る風のないのが賛否の分かれるところかも知れない。出だしから後書きの一文を引き合いに出し恐縮ながら、庄内の事情が会津のそれに比べあまり知られてこなかった理由がそこに端的に示されているので、紹介したい。著者が鶴岡市の松ヶ岡開墾記念館の職員に聞いたという話から、「新政府軍は、自分が負けた歴史なんかは残さないでしよう。逆に、新政府が語れないほど庄内藩は強かったんですよ。」

これは、考えてみれば皮肉な事で、東北においては古代アテリイの時代から平泉藤原氏へと続く連戦連敗

の歴史イメージが定着し、『消えた蝦夷たちの謎 東北編』(関裕一 二〇一〇年)に至っては

「東北人は、なぜか歴史の勝者でいられないのである。敗者である事を誇りに思い、自ら敗者である事を選びとっているのではないかとさえ思えてくるのである」と、完全に「東北＝敗者」と結び付けられている。この一般に深く浸透したイメージの下では、一時期一地域でいかに連戦連勝を重ねようと、大局の大敗北の前にはその記憶は掻き消され陰に隠れてしまうだろう。

私が以前拙筆に取り上げた、北畠顕家公の業績もまた然りと思う。そもそも、次々に同盟他藩が薩長の軍門に下る中、なぜ庄内藩だけが負け知らずの精強を貫く事ができたのか。その秘密を解く鍵は、やはり豪商・本間家の財力と、致道館という身分を問わない高い道徳教育の場であるが、実際のところ、酒井氏入部当初から庄内藩が上手くいっていった訳ではなく、長年の混乱や衝突の後、本間家あつての財政建て直し、致道館の設立に至ったのがようやく七代・忠徳の時であった。

庄内という土地の気質が、その時にがらりと変わったのか、それとも古来この地が育みながら、長い年月陰に隠れていたものだったのかはわからない。そもそも庄内平野とはどのような土

の歴史イメージが定着し、『消えた蝦夷たちの謎 東北編』(関裕一 二〇一〇年)に至っては



東北には全国的にもよく知られた場所が多数あるが、どの土地もある特定の時代に各々「輝きを放つた」経緯を持つている。

縄文時代は現在の青森県が列島の文化の中心であった可能性が高く、平安時代には岩手県が長きに渡り朝廷をも揺るがす戦場であり、また平泉の出現により名実ともに東北の中心となった。その滅亡後は長い混乱期を経て徳川時代には伊達・上杉両雄によって仙台平野、米沢盆地が開かれ、奥羽の顔的存在となつてゆく。

この間、千年以上。庄内地方が注目を集めた時期という「越」(現在の新潟県)の北辺が出羽国となり、国府が置かれたとされる八世紀、源義経が奥州入りする際に通過点となり戦場ともなった十二世紀、そして徳川幕府終焉を告げる、戊辰戦争の時期のみである。前二点は特に気風をアピールし得る事跡ではない事から、庄内の存在を全国に知

らしめた時代はほぼ、戊辰戦争の孤軍奮闘の一時と云って差し支えないだろう。ただ、歴史の端々に、その特異性の片鱗は残されているように思える。庄内出身の作家・藤沢周平が『義民が駆ける』で描き出した天保十一年の「国替え阻止運動」は庄内藩の領民が自らの意志で幕府に訴え、これを動かした偉業であり、領民が率先して武器を取り庄内を守った、幕末の姿にも大きく重なるものである。遡って出羽国成立以前、つまり朝廷の支配に下る前には「蝦夷(あるいはこの地方においては蝦狄の国)だった」という側面もまた、見過ごせない。縄文時代から存在したという、羽黒山を筆頭とする山岳信仰の事は言うに及ばず、鶴岡市中央部に位置する、二つの「日枝神社」の存在も興味深い。上山王・下山王でセツトの社であり、共に当地方最古の社とされているが、上山王の社伝には「用明元年(五八五年)に東北鎮護のため」創建された、とあり驚かされる。これは出羽

国成立より百年以上も前の事で、つまり当地が未だ明らかに「蝦夷国」だった時代の事だったはずである。果たして、当地に何が起きたか？実は気になる記述が「日本書紀」にある。四年前の五八一年、蝦夷の首領・綾糟が「辺境を荒らし」たかどで中央へ出向させられた、というのだ。これは実在したと思われる蝦夷の人名が記載された最初の例であるが、綾糟がどの地方の蝦夷だったのかは現在も不明である。しかし年代の極めて近い事実を考慮すれば、後の庄内に創建される日枝山王社と全く無関係とも思えないのである。

そしてもう一つ、付け加えたいのが現在の新潟県と山形県、日本海側の県境に存在する「日本国」なる標高五五メートルの山の事である。伝承では、朝廷の遠征軍が北上中この地で苦戦し、ようやく制した日印として「こままでが日本国」と山に命名した、という。異説もあるが、当地が長く念珠の関・鼠ヶ関として境界視されてきた謎にまつわる伝承として注目される。

実際にこの日本海側の関は、太平洋側の軍事的境界が時代により白河や伊達・庄内山に変遷したのに対し、常に動く事なく戊辰戦争においても境界として、戦場ともなり続けた。

正史としては確認できない庄内地方の反骨の事跡が、地名や社伝の奥底に隠れているように思われてならないのである。

作中、西郷が庄内藩中老・菅実秀にかけける言葉が、現代を生きる庄内人の心を痛ましく突く。「菅殿、このような若者が庄内に多数いる事が庄内の強さでありますな。(中略)だから庄内はますます発展するのであると思います。今後庄内が発展するのが見えるようです。」

果たして、その後の庄内は発展したか・会津や盛岡など、過酷な処遇から明治時代にはその苦境をバネに飛躍する人物が多く輩出した地域に対して、寛大な処置に浴した庄内についてあとがきではこう評される。「裕福であれば、ハングリ―精神がなくなり、その分、頑張りが少なかった。庄内から都会に出る事もなく、そのため活躍している人物も少ない。」

優れた人材は中央へ流出し、豪商本間家も戦後の農地解放により衰えた。東京一極集中の流れの中、全国の地方が陥る衰退への道を、庄内もまたたいた走っているように思える。

庄内の、脚光を浴び輝きを放つ時代は永久に過ぎ去ったのだろうか？

岩手県遠野市の佐々木喜善が柳田國男に語った郷土の伝承が『遠野物語』となり、全国に東北の存在感を示したのが、明治時代である。青森県では平成の世になって三内丸山遺跡の存在が認められ、日本人の歴史観を根底から覆した。東北人が意図せずとも、東北の地は日本を震撼させ続けているのであり、それは庄内も例外ではない。稲の品種改良が盛んだった庄内の生んだ「亀の尾」はコシヒカリ、ササニシキはじめ現在の最上級のコメの源流となつたが、今や庄内は優れた食材を豊富に生み出す土地として、その深淵な自然環境と育まれた文化が静かな注目を集めている。全世界の環境破壊、忍び寄る大量絶滅の時代を前にした、庄内の「敵」はもはや、朝廷でも薩長でもない。人類を救済すべき鍵を握る思想を秘めるとされる東北の、その代表地として、また人知れず勝つためのその戦いが既に始まっているのだ。

鶴岡市の下山王神社と筆者



鶴岡市の下山王神社と筆者

シリーズ 遠野の自然 「遠野の寒露」 遠野1000景より

昨年(2016年)に続き、今年も遠野まつりに行けなかった。よんどころない所用が重なったためではあるが、残念で仕方がない。

また、これまでに知人たちに遠野まつりのことを何度か話してきたが、口々に連れて行って欲しいと言われてきたのに、その期待にも応えられない。申し訳ない思いでいっぱいである。

遠野1000景さんの写真を見て、そうした気持ちを少しでも鎮めようと思う。

*

南部ばやしはとても好きである。衣装の鮮やかさと子供たちの踊りの組み合わせが特に好きである。

しし踊りは遠野まつりの主役のひとつであり、欠かすことはできない。夜のしし踊りをまた見たい。

流鏝馬はまだ見たことがない。来年こそと思う。

近頃、単なるイベントに堕しつつある祭が多いなか、遠野まつりが、まつりは神事であることを思い起こさせるのである。



南部ばやし



南部ばやし



南部ばやし



遠野南部流鏝馬



しし踊り



介添奉行 よ〜射たりや〜



担ぐ



しし踊り

ほやと東北地酒堪能 仙台駅前ほや料理専門店 「まぼ屋」



ほや飯セット

ほやは旬の夏以外でもおいしく食べられます
当新聞のほやの国内消費拡大支援活動は、ほやの旬といわれる夏を過ぎても、まだまだ続きます。また今回の記事で、夏だ

仙台駅前「まぼ屋」訪問
今回は、仙台駅前に最近オープンした本邦初のほや料理専門店という「まぼ



ホヤ料理メニュー



ほや珍味3点盛り

数々のほや料理
まずは店長さんにご挨拶し、最初に出てきたのが付きだしの「ほや煮込み」。ごぼうとの相性がとてもよ



ほやしゃぶしゃぶ



付きだしのほや煮込みと東北地酒飲み放題ラインアップ

メニューを見て最初にくぎ付けになったのは「25種類の東北日本酒飲み放題コース」。迷わず注文。90分

「ほや珍味3点盛り」は、塩辛、ほやチャンジャ、三升漬。特に三升漬のは、コウジ、醤油、南蛮で味つけされた初めての味が印象に残りました。店長さんにも



ほやしゃぶしゃぶ

この三升漬の単独商品化を提案させていただきました。とにかく、この三点盛りだけでも東北地酒は何杯もいけます。

「ほや料理の最後は「ほや飯セット」。ほや飯は上品な風味でオススメです。ほや汁もとても美味しかった。



東北地酒一部

「25種類の東北日本酒飲み放題コース」
店長さんからは、冷蔵庫にある一升瓶からそれぞれ個別の器に移し替えて、好きなだけ飲んでくださいとの説明があり、三陸酒海鮮会方式と似ていると親し

虎穴純米酒、秋田の酒専門店でのなじみの白瀑純米ど辛、東北から少し浮気をして車坂おふるくろ純米秋あがり、最後は、宮城の乾坤一純米酒。他にも飲んでみたい地酒はたくさんあつて心残りでした。

偶然の再会
入店の際、店長さんに飛梅の神田店でお会いした松野さんのお話をしたので、帰りに、当の松野さんがたまたまいらして、久しぶりの再会となりました。松野さんのご紹介で来た「まぼ屋」でしたが、ほん



店長と再会した松野さん

宮城・岩手・秋田県境の紅葉の栗駒山登山



栗駒山

十月初旬は北国では紅葉の季節がはじまる。澄み切った青空のなかに紅葉が映える景色を今年は見たいものだと考えていた。また、単に紅葉の風景を見るよりも、山登りとセット

トにしたならさぞや感激することだろうとひそかに思っていたところに、東北に所用が出現した。これとは別に、栗駒山には再び登ってみようかと考えていた。



頂上付近の見事な紅葉

「東栗駒コース」の登りはぬかるみのなかを、泥だらけになって登っていった。加えて、ところどころに小さなハシゴが掛けてあって、最初は登るのに一苦労した。コース選定を誤ったかと若干後悔した。

今回は、東京から出かけたその日の昼から登って降りるという時間制限があるスケジュールだったので、登りを「東栗駒コース」にして、下りを「中央コース」に設定した。

そんなことで、紅葉の栗駒山登山を企画した。

再びというのは、今から約五十年前頃に一度登っていたからである。その時は、山登りの楽しさはまったく感じず、景色も見えない山道をただ歩くだけの苦しいものだった。

そんなことで、紅葉の栗駒山登山を企画した。

しかし、途中から、突然視界が開け、山頂方面に見事な紅葉が出現した。振り返ると、紅葉の低木の向こうに遠くの山並みが霞んで見え、素晴らしい光景が展開していた。



中間地点での宮城県側の眺望

さらには、人生初の沢登りも体験することになった。初めは、ルートもはっきりせず、かつ巨岩が立ちふさがるルートに戸惑い、どうしようかと思っただが、ここまで来た以上、後戻りはできない。

深い流れを避けながら、約百メートルを登った。そこ抜けると東栗駒山が見えてきた。手前には大きな岩の塊が控えている。それを迂回して東栗駒山登頂。

指して稜線を歩く。最後の登りは大分きつかった。数百メートルも続く急階段をひたすら登る。休まず登れず、何回か休憩を挟んでの山頂到達。



東栗駒山

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ



頂上から岩手県側を望む

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ



100メートルの沢登り

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ



筆者の登頂記念写真

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ

山でリベンジを果たしたような気分だった。下りは「中央コース」。山頂近くは周囲の景色も見えていたが、すぐに石畳の下り坂しか見えなくなった。ただただ歩くだけの、あ



登山コース案内看板